

特集

福祉大会と福祉作文



第32回

寒川町社会福祉協議会福祉大会

昨年12月12日(土)、福祉大会は無事に開催の運びとなりました。来場者250名という盛会の中、旭が丘中学校邦楽部による箏の演奏や北京パリンピック自転車競技金メダリスト 石井雅史さんの講演会等を行いました。第2部の表彰式は、地域活動への貢献や福祉作文の優秀作文など、本会から感謝の気持ちを伝える場となりました。ここでは表彰の方々を紹介します。

(順不同・敬称略)

社会福祉功労者の表彰・感謝

1 表彰

◇社会福祉功労者

佐藤信江、吉川京子、木村章恵、栗田洋子、長崎早苗、小池美三雄、川島菊江、芳澤敏子、小笠原良夫、川又節男、野島真理子、羽田幸弘

2 感謝

◇役員功労者

飛弾恭子

◇多額寄附者

旭ファイバークラス労働組合、河西工業福祉協議会、寒川ライオンズクラブ、寒河江臥龍ライオンズクラブ、寒川町婦人会、フジ企画、日本ボーイスカウト神奈川連盟寒川第一団、

全日本プロレスチャリティー寒川大会実行委員会

3 神奈川県社会福祉協議会会長表彰(伝達)

佐藤信江、吉川京子、木村章恵、川口里美、佐々木久枝、永嶋京子

4 神奈川県社会福祉大会受賞者(報告)

(社) 吉祥会寒川ホーム介護老人福祉施設部門、加藤美加子、武田尚子、寒川町立南小学校、寒川町立旭小学校、寒川町立一之宮小学校、寒川町立小谷小学校、寒川町立寒川小学校

5 福祉作文優秀作品

◇小学生の部

大垣風香、軽部紗也、斎藤優衣、高沢京吾、田谷彩芽、長友悠聖、増山大智、三留葵奈、池田亮太、森島梢絵、渡邊竜輝、岡崎利南、石原百合彩、堀田小桃里、山口萌子、和田彩夏

◇中学生の部

金子優美、小島信人、野口結衣、井上菜愛美、加藤彩乃、吉川裕樹、永岡詩穂、藤岡涼音、松原望、津幡芽衣

本年度の福祉作文の概要

小・中学校の児童・生徒の皆さんを対象に毎年募集している福祉作文ですが、今年も多く応募がありました。選考は大変難儀しましたが、応募作品434編の中から小学生16編、中学生10編の合計26編の優秀作文が選ばれました。次ページからその一部を紹介します。

小学生の部



アイパッチと私

・福祉大会発表

・県コンクール応募

寒川小学校四年 大垣 風香

「あら、目をけがしちゃったの？」

私は、いつもこうやって声をかけられます。私は、弱視という目のハンディキャップを持っています。右の目と左の目の見え方がちがうので、メガネの上からアイパッチという物でいい方の目をかくして、視力を上げる訓練をしています。私のお姉ちゃんも同じでした。でも、もう良くなってメガネだけで大丈夫になりました。アイパッチをつけると、いい方の目をかくされるので大変です。物がぼやけて見えたり、遠くの方が見えにくいのです。教科書の小さい字が見えづらいので、目をこらして見る必要があります。はつきり言ってめんどくさいのです。でも、もつといやなのは、色々な人にじろじろ見られたり、なにそれ？と言われる事です。学校で、上の学年の子達にこそそこそかげで言われたり、指をさされている時もイヤな気持ちになります。ひどいいたいどや心ない言葉に悲しくなったり、さみしい気持ちになります。もう思い出したくないほど最悪な気分です。アイパッチなんてしたくない、何度もしました。でも答えはいつも同じです。訓練だからダメ！アイパッチをつけてい

るとはずかしいし、めんどくさい。周りが見えなくて不便。良いことなんて一つもない。私はそう思っていました。でもある日、アイパッチをしてコストコに行ったら、びっくりすることがありました。私と同じ年くらいの子がアイパッチをしているのに、どうどうと3DSをしていました。周りの人の目も全然気にしていないし、私と目が合っても平気な顔をしています。私は、その時こう思いました。アイパッチって、はずかしくないんだ。心の中に急に力がわいてきました。学校で福祉の勉強をした時、すぐにアイパッチの事が頭にうかびました。ハンディキャップは、とても不便です。いやな事もたくさんあります。でも、私にはアイパッチが必要です。世の中には色々なハンディキャップを持つ人がいます。目が不自由だったり、体がうまく動かなかったり、人それぞれがいます。見方もそれぞれがいます。人と少しちがうからといって、不安になる必要はないと思います。私は、ハンディキャップを持つ人もそうでない人も安心してくらせるような世の中になるといいなと思います。



ひいおじいちゃん

・県コンクール応募

小谷小学校四年 池田 亮太

ぼくのひいおじいちゃんは、老人ホームで暮らしていました。

ひいおじいちゃんは車いすで生活していたのでぼくたちがいくと、いつしようけんめいタイヤを回してむかえてくれたのですが、ぼくは手が痛そうでかわいそうだと思ったので押してあげました。ひいおじいちゃんは、すぐくよくよしていました。ぼくもよくくよくよしてくれてうれしかったです。その時ぼくは「車いすが自動で動いたらいいのになあ」と思いました。

老人ホームのおじいちゃんおばあちゃんは、ぼくたちみたいな子供がくるとものすごくよろこんでいました。老人ホームの人たちはみんなやさしい人でひいおじいちゃんとも仲良しでした。でも、この施設にすんでいる人は家族とはなれてすんでいるから、「さみしいのかな」と思いました。本当は「自分の家族とすみたいんだらう」と思ったから、うちにかいごの人がきてくれてお世話をしてくれれば、おじいちゃんおばあちゃんたちも安心して自分の家で生活ができると思います。だけど、おうちでお世話をしてくれる人が少なくなっているそうなのでもつとふえてほしいです。

ぼくはしょうらいそういう仕事をしてみたいと思っています。どうしてかというと、ぼくは体が大きいので車いすや人をささえてあげることが出来るからです。だから、こまわっている人を見かけたら必ず助けたいです。

人を助ける事は大変かもしれないけれど、ぼく達も今までおじいちゃん達に教えてもらったり、助けてもらうことがたくさんあったので今度はぼく達の番です。

おじいちゃん達とぼく達が仲良くなれば、みんなが楽しく幸せに暮らせると思っています。「福祉」と聞いて最初は何の事か分からなかったけれど、そんなにむずかしい事ではなく人にやさしくしてあげる事だと気付きました。ふだんから思いやりを持って行動したいです。

中学生の部

今、自分ができること。

・県コンクール応募



寒川中学校三年 野口 結衣

バリアフリー。それは障害者や高齢者が安全に、住みやすくするために障壁となるものを取り除くことであり、近年公共施設や商業施設の建築の際に重要視されているものです。例えば、ノンステップバス、横断歩道を渡るときに流れる音、点字ブロック、さらに自動ドア、コイン投入口にトレーが付いていて、コインを入れやすくなった自動販売機など、身近なものもバリアフリー対策だということを知りました。

このようなバリアフリー対策の数は昔と比べて多くなっています。しかし、これらのバリアフリー対策があるからといって、障害者や高齢者が安全に住みやすい生活ができるわけではありません。

私は駅で仕事をしている父に福祉について

話を聞きました。やはり父も「バリアフリー対策だけではなく、人の手で助けることも大切だね。」と言っていました。

父が仕事をしている駅にも、多くの障害者や高齢者がよく来るそうです。その人達を手助けするために、父はサービス助手士の資格をとりました。サービス助手士とは、高齢者や障害者を手助けするときの「おもてなしの心」と「介助技術」を学び、相手の手助けができる人のことです。例えば、耳が不自由な人ならボードなどに文字を書いて会話をします。目が不自由な人なら手を引いて行きたい場所まで誘導します。車いすの人なら電車に乗り降りするときに、車いすを数人でかかえて手伝ったり。父は障害者や高齢者にも、電車を利用しやすいように色々なことを手伝うそうです。

しかし、中には手伝われることを嫌う人もいます。私も三年前に、障害者の疑似体験や話を聞くことができます。ボランティア体験をしに行つたことがあります。そこで、一人の目の不自由な男性が「何でも手伝ってもらって、特別扱いされるのは嫌なのです。」と言っていたのを思い出しました。三年前は、その言葉を意外に思っていました。しかし今はこのことから、手伝わないでほしいと言われたら、無理に手伝わないで、相手の気持ちを考えて行動することも大切だと思いました。

私は父からノーマライゼーションのことも聞きました。ノーマライゼーションとは、障害のある人たちも障害のない人と同じように、

平等に生活できる環境を作り出すことです。私もノーマライゼーションは素敵なことだと思います。なぜなら、障害のない人と同じように生活できて、平等、つまり差別されたり、特別扱いされないからです。

しかし、このような環境を完全に作り出すのは難しいと思います。今よりもっと障害者や高齢者も住みやすい環境を作るには、人の手で手助けしながらも、障害者の気持ちを理解することが大切だと思います。

手伝うことは簡単です。しかし、手伝う前に相手に声をかけることが難しく、なかなか障害者や高齢者を助けたという経験がない人も少なくないと思います。それは障害者や高齢者に限らず、障害を持っていない人でも助けが必要なきががあります。そんなときに誰かに手伝ってもらえると、とても助かります。

三年前の障害者の疑似体験で目隠しをして歩いたとき、今自分がどこにいるのかわからなくてとても怖かったです。しかし、誰かに手を引いて誘導してもらうととても安心しました。なので、もし自分の近くに助けを必要としている人がいたら「きつと何とかなるだろう。他の人が助けてくれるだろう。」と、逃げずに声をかけてみようと思います。どんなときでも、声をかける勇気を持つて。この勇気が大切だと思います。障害者や高齢者、困っている人を助けて、相手が少しでも喜んでくれたら私も嬉しいです。こうした行動を一人一人が行うことで、みんなが住みやすい環境にできると思います。



妹は変わった。

・福祉大会発表

・県コンクール応募

旭が丘中学校三年 加藤 彩乃

「ウワーツ。」という大きな泣き声が、ゴンツという鈍い音がした直後、夕方の図書館に響き渡りました。泣き声は妹で、ゴンツという鈍い音は、妹が障がいをもつ人に殴られた音でした。これが三年前の私達家族に起きた、障がいをもつ人との距離を考えてしまうようになった一つのきっかけでした。

当時、私は小学六年生で、母と妹二人と夕方の図書館によく行っていました。平日の閉館近くの遅い時間なので、いつも人の数は少なく静かな図書館でした。しかし、その日はいつもと少し違っていました。年配の男の人と一緒に来ている大人の男の人が、大きな声で飛びはねていました。その様子から、すぐに障がいをもつ人だと分かりましたが、私達は特に何も気にせず過ごしていました。そんな中で小学二年生だった妹が一人でパソコンの前に座っていた時に、いきなり後ろからグーで頭を殴られそうです。妹は突然のことに何がなんだか分からずにパニック状態でした。離れた所にいた母が慌てて妹に駆け寄り、図書館の人も集まってきました。殴った人は大きな声を出しながら、まだ飛びはねていました。その後、図書館の偉い人達がたく

さん来て、母と妹に謝っていました。しかし、母は「謝る人が違う。謝るのは、一緒に来ていた人ではないか。」と言っていました。いつの間にか、その二人はいなくなっていました。

このことがきっかけで、妹が障がいのある人を怖がるようになってしまいました。しばらくの間、図書館で一人で行動できなくなりました。今でも電車内で同じような人を見かけると、車両を変えたりしています。母は私達が障がいをもつ人を避けたりしないように育ててきたそうです。しかし、この事がきっかけで「自分の身を守る為には、離れることも必要」という教えに変わってしまいました。

では、どうしたら避けなくていい世の中になるのでしょうか。今の日本で「福祉」という言葉を見たり聞いたりしない日はないと思います。政治家は福祉の充実を訴えていますし、選挙になれば立候補者全員が必ず「福祉」を公約に入れます。当たり前のように聞くこの言葉ですが、改めてその意味を考えるのと、私には分かりません。国語辞典で調べると「人々が安心して暮らせる環境」と書かれていました。私は今の世の中が決して良い環境ではないと思います。目に見える所は、確かに良いと言えます。お年寄りや障がいをもつ人を支える為の設備は、町中を見回せばたくさんあります。しかし、目に見えない所は

どうでしょうか。サポートする人の不足や、一般の人からの偏見をもった視線など、問題はたくさんあります。

私も正直、少し怖いです。妹の時のように、障がいをもつ人が大人の男の人で、大声で跳びはねていたら、関わりをもたないように離れると思います。でも、サポートする人が障害をもつ人の側にいてくれたら少し安心できると思います。妹の時、サポートしていたのは小柄なおじいさんが一人でした。大きな男の人が跳びはねていたので、何かあった場合、とても一人では抑えられないような感じでした。そして、実際に起きてしまいました。もし、サポートするシステムがしっかり整えられていたら、防げることも色々あるのではないのでしょうか。

障がいをもつ人はたくさんいると思うので、なかなか難しい問題だと思っています。しかし、少しずつでも解決していく事で、怖がる人や冷たい視線も減っていくような気がします。

世の中にはたくさんの方がいて、皆一人一人違います。「みんな違ってみんないい」これは以前読んだ金子みすゞさんの詩で、私の好きな言葉です。障がいをもつ人も、またない人も、皆が「安心して暮らせる環境」になれば、お互いを認め合って暮らせる社会になると思います。みんな違ってみんないいのですから。